

17 膀胱全摘除術周術期の大建中湯使用傾向と 周術期アウトカムに対する効果の検討

弘前大学大学院医学研究科 むつ下北地域医療学講座（泌尿器科）

藤田 尚紀、堀口 裕貴、百田 匡毅、細越 正吾、
田中 壽和、福島 隆史、櫻井 悠、畠山 真吾

【背景・目的】

大建中湯は術後イレウスの予防や治療に有用と報告されているが、膀胱全摘除術周術期における使用傾向と有用性は不明である。

【対象と方法】

2000年9月から2024年10月の期間に弘前大学医学部附属病院およびその関連施設で膀胱全摘除術を施行した497名で後ろ向きに検討した。大建中湯の使用傾向を調査した。術後3日以内に大建中湯の内服を開始したstudy groupと、それ以降に内服を開始したまたは内服しなかったcontrol groupの2群に分け比較した。主要評価項目はイレウス発症率、副次評価項目は全GradeおよびGrade 3以上の合併症発生率、経口摂取開始までの期間、術後入院期間とした。

【結果】

年齢の中央値は71歳、腸管を利用した尿路変向術を受けた割合は62%であった。99名(20%)の患者が術後3日以内に大建中湯の内服を開始していた。2000-2009年、2010-2019年、2020-2024年の術後3日以内大建中湯使用率はそれぞれ0%、14%、38%と有意に増加していた($P<0.001$)。study groupでは、イレウス発症率はstudy groupとcontrol groupで差を認めず(15% vs 14%、 $P=0.834$)、交絡因子で調整した多変量解析でも同様の結果であった(オッズ比 1.462、 $P=0.261$)。全GradeおよびGrade 3以上の合併症発生率に2群間で差は認めなかった。経口摂取開始までの期間はstudy groupで有意に短く(2日 vs 5日、 $P<0.001$)、術後入院期間もstudy groupで有意に短かった(34日 vs 35日、 $P=0.011$)。

【結語】

術後3日以内の大建中湯内服とイレウスやその他の合併症の発生率に相関は認めなかったが、経口摂取開始までの期間と入院期間の短縮に有意に相関していた。